

日本中国學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇一二年(平成二十四年)十二月十二日

第二號(通卷第二十二号)



編集◎九州大学人文科学研究院中国文学 竹村則行

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

メールアドレス: takemura@lit.kyushu-u.ac.jp

発行◎日本中国學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

ファックス: 03-3251-4803

メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

◎ 目録

- 〇二 日本漢文部会について
堀池 信夫
- 〇四 中国文選学会第十屆年会暨成立二十周年
國際學術研討会に参加して
栗山 雅央
- 〇六 六朝學術学会の成立と現状、及び課題
佐藤 正光
- 〇七 各種委員会報告
大会委員会(花登 正宏)
論文審査委員会(富永 一登)
出版委員会(竹村 則行)
選挙管理委員会(土田健次郎)
将来計画特別委員会(佐藤鍊太郎)
- 一〇 日本中国学会 2011年度(平成23年) 収支決算書
- 十一 日本中国学会 2012年度(平成24年) 予算書
- 十二 学界展望へのご協力(資料提供)のお願い
- 十三 平成24年度会員動向
- 十三 平成24年度新入会員一覧
- 十四 事務局からのお知らせ
- 十五 「国内学会消息」についてのお知らせ
- 十五 「研究会等開催の案内」記事募集
- 十六 「日本中国学会報」論文執筆要領

日本漢文部会について

堀池 信夫
副理事長

平成24年10月に大阪市立大学でおこなわれた本学会第64回大会時に開かれた理事会・評議会において、将来計画特別委員会から提議された日本漢文部会常設案について討議された。その結果、従来二本柱であった哲学思想部会と文学・語学部会に、日本漢文部会を加える三本立ての方向性が了承された。

本学会大会において日本漢文(および漢文教育)部会が積極的意図をもって開かれたのは、広島大学における第62回大会が最初であった。その5年前、平成19年の名古屋大学での第59回大会でも日本漢文部会が設置されたことはあったが、ただこの場合は何らかの企図があったというよりもプログラム編成上、日本漢文の発表がある程度まとまったからということだったと思われる。しかしこの事実はそのころから日本漢文研究が着実に盛り上がっていたことを雄弁に物語るものだったと思う。

ところで広島大学において日本漢文部会が設置された際の積極的意図とは、じつは背景にその十年ほど以前から将来計画特別委員会において中国学研究の衰退傾向に対してどのような方策があるだろうかが討議されていたことがあった。日本の中国学衰退の要因の一つに、中

学・高校における漢文単位数の激減、それに比例して大学入学後に中国学関係を専攻する学生数の著しい落ち込みが指摘されていたのである。将来計画特別委員会は理事会と諮りつつ、本学会会員でかつ全国漢文教育学会会員の方にメンバーに入ってもらうなどしてその方策を探っていたが、なかなか有効な手立てが見つからないでいた。

そこに当時の池田知久理事長が、本学会は「中国に関する学術の研究を目的とし、主として中国哲学・中国文学・中国語学研究に従事する者の全国的かつ総合的な学会」であり、「中国に関する学術の研究」を主目的とするが、ただ根本的には「日本における中国に関する学術研究」の学会であって日本の学問研究の一端を担う学会であること、また日本における中国研究(中国文化受容)には長大な歴史があり、それは日本文化の根底の一端を形成していること等々に鑑み、学会執行部の責任において部会設置を決断し、広島大学野間文史教授に打診、広大教員各位のご協力を得て開催されたのである。その際、池田理事長は和漢比較文学会等の他学会とも連携をとり、かなりの数の他学会会員の方に本学会に入会していただいた。そして……

私見であるが、広大でのこの部会開催は大成功であったと思う。多くの水準の高い発表とそれらへの質疑は相当に白熱し、この分野の研究の充実と未来への可能性を強く感じさせたのである(余談ながらその時の会場の緊張感から壇上で失神してしまう発表者もいた。その際の広大側の対応は見事であった)。

ところで本学会では、大会開催における部会編成・プログラム編成等は基本的に大会開催校に任されている。理事会や大会委員会は基本的にその部会編成・プログラム編成を承認し支援する役割を担うだけで、大会開催校に大幅な裁量をゆだねている。ただそうした場合、もっとも困難な仕事は(実際に大会を開催したことがある経験から述べれば)二日間の大会開催日程に発表者数をびたりと収めきることである。東京・大阪・京都以外の地方での大会開催はだいたいのところ発表希望者・一般参加者とも少なめになる傾向があり、二日間を埋めるのに苦労する。また発表の内容に応じて部会数を増やしてゆくと、二日間の日程はととも埋めきれない(バラけてしまう)。従来の哲学・思想と文学語学の二部会立てはそのよ

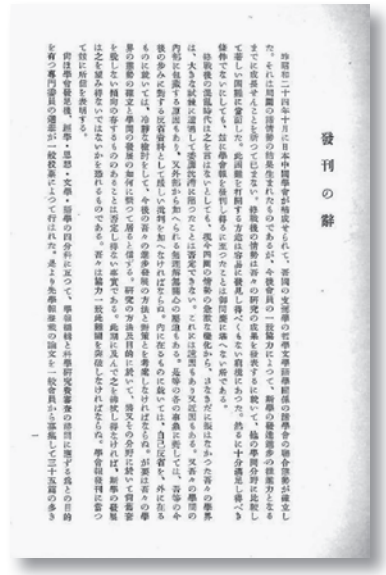
社会文化学会・日本道教学会・日本宗教学会あるいは東洋史学関係諸学会等々の他学会・協会との連携をより一層深めてゆくための大きな契機・窓口になりうるもの

と考える。一方、二部会体制も歴史的に見たとき、決してリジッドなものではなかった。先に述べた名古屋大学の第59回大会以外にも、大会開催校の事情に応じて結構自由自在に部会編成・プログラム編成がおこなわれ、三部会や四部会となった大会も少なくなく、それ以上の多数部会を

連ねた大会も何回かあった。それゆえ三部会体制となったとしても従来の大会運営と大きながいはあまり出てこないのではないかとも思う。もちろん一つの部会を二日間通じて朝から晩まで発表者で埋めきる、ということを行っているわけではない。ある一日の午前のみ、あるいは午後のみを一つの日本漢文部会として設定するということであってもまったくかまわないのである。

また、10月7日の理事会においては日本漢文部会を常設的なものとして維持するため、まず大会委員会が大会開催校との間の窓口となり、研究推進・国際交流委員会が発表者等について場合によったら具体的支援をおこない、さらに将来計画特別委員会がそのバックアップをおこなうということが了承された。そしてもちろんこれらは最終的には執行部が責任をもつということになる。

本学会の立場からいえば、日本漢文部会常設の評判が諸方面に伝わってゆけば、さらに新たな会員の入会につながる可能性が高いものと思う。が、それは小さなことである。それよりも何よりも、中国学の本場である中国の学問的伸長に対して、われわれ日本の中国学研究者がわれわれの学問の歴史的基盤(奈良・平安から明治～平成に及ぶまで)しっかりと研究・把握していなければ日本の中国学の存在自体、意味がなくなるのではないか。そうでなければ日本の中国学には未来はないかもしれない。日本漢文部会の常設はそれほど大きな意味をもっているのだと思う。



発刊の辭

うな時、さまざまな主題・方向性をもつ発表を、ともかくも割り振ってゆくにはきわめて有効な手立てだったといえる。この二部会体制は昭和24年の第1回大会において哲学部会と文学語学部会に分かれて開かれたことがまずは大きな由因なのだろうが、第2回大会ではとくに部会立てはなかったので、第3回大会で経学・思想部会と語学・文学部会に分かれたころからその実用性によって次第に定着してきたものと思われる。もちろん『日本中国学会報』第1号の「発刊の辭」に「吾国の支那学の哲学文学語学関係の聯合態勢が確立した」とあるので、二部会体制は本学会としての歴史的必然性もあったのであるが。

そこに日本漢文部会を常設して基本的に三部会立てにするというのは、大会開催校にとって負担が増えるということになり、執行部としてはなにやら「申し訳ない!!」感もないではない。ただこの部会を常設するということは「日本における中国に関する学術研究」を旨とする学術団体として、日本文化の根底の一端を形成してきた「漢文」文化を通じ、将来の日本文化に対する責任を表明するという重要な意義もあると思う。また第2回大会以来、日本漢文に関する研究発表は、濃淡はあるものの常に絶え間なく存在しつづけてきた。そしてさらに日本漢文部会の常設は、和漢比較文学会・全国漢文教育学会をはじめ日本思想史学会・日本中国語学会・東方学会・中国

中国文選学会 第十周年会暨成立二十周年 国際学術研討会に参加して

九州大学大学院
栗山 雅央

今回の学会は、北京西駅から火車に乗り込み開封駅へと向かう約10時間かけての旅路であった。というのも、筆者は現在、中国北京の清華大学にて高級進修生として留学中であるためである。前年度の南京での『文選』学会に参加した際には、留学直前と言うこともあり、右も左もわからず、先生や先輩方の後ろをついて行くことしかできなかったことを覚えている。あの頃は一人で切符を購入するのもままならず、今思うと単純な中国語さえ緊張のためか聞き取れず大変苦労した。そう思うと、まだまだではあるがこの一年の留学で多少は成長したかとも思う。

さて、2012年8月24日から27日にかけて、古都開封にある河南大学の主催により、河南大学内の中州国際金明酒店にて「中国文選学会第十周年会暨成立二十周年国際学術研討会」が開催された。大会参加者は100名以上にのぼり、中国国内においても非常に大規模な学会の一つである。日本からは、前年度に引き続き、静永健(九州大学)、谷口洋(奈良女子大学)、陳獅(広島大学、以上五十音順、以下同)の各氏に筆者を加えた4人、また今年度からは河野貴美子(早稲田大学)、中尾健一郎(梅光学院大学)各氏の2人が新たに参加し、計6人での参加

となった。台湾からも多くの研究者が参加予定であったが、24日から翌25日にかけて台湾上空を通過した台風の影響により欠席者が出たことは残念であった。

学会の進行を概括すると以下の通りである。24日に報到を済ませると、翌25日には8時半に合同の写真撮影が行われ、続けて開会式が行われた。中国『文選』学会会長の許逸民氏が開幕の辞を述べられ、代表講演が行われた。そして昼休みをはさみ、午後からは各部会に分散し個別の討論となったが、これは翌26日の午前及び午後まで続けられた。各部会はそれぞれ第一部会「『文選』版本、注釈研究」、第二部会「『文選』学史研究」、第三部会「『文選』文体研究」、第四部会「『文選』具体篇目及其他研究」と分類され、『文選』学に関する幅広い研究成果が報告された。その報告形式は、90分を一単位として4-5人の発表者が12分間で報告を行い、それぞれに批評者が割り振られ4分間で発表に対する批評を行う。その後、総合討論として15分が割り当てられていた。また、各部会には『文選』学会の理事が振り分けられており、総合討論の際には流れを主導する役割を担っていたようである。筆者は第四部会に参加したのであるが、上海師範大学の曹旭教授が総合討論を主導され、厳しくも示唆に富んだ講評をされておられた。恐らくは他の部会でも同様であったのではなかろうか。



写真1 分科会討論風景

さて、筆者は25日の午後には発表予定であったが、昼食時に白酒や紅酒が振る舞われる宴会の形式であったために、聊か酔ってしまった。というのも、筆者が発表前に緊張している旨を円卓を囲む他の研究者に伝えると、それ

ならば是非とも酒を勧められ杯を重ねすぎたためである。更には、中国では会食時に多くの先生方が各円卓を回り乾杯を行う習慣があるが、大会主管校である河南大学の郭宝軍教授が前年度に南京で『文選』学会が開催された際の筆者の酒量を覚えておられ、ここでも勧められるままに杯を重ねてしまった。そのような状況でも誰一人として咎めるような研究者はおらず、皆が一様に楽しんでいたように感じられた。このように、中国での学会では昼間から宴席が設けられることが一般的であり、日本における学会状況と異なる点の一つと言えようか。

研究動向については、日本人研究者が配属された第一・四部会を中心に概括したい。第一部会はテキスト及び注釈に関する発表が中心であったが、会長の許逸民氏及び北京大学の傅剛教授の主導により、議論の中心は刊本時代以前の『文選』に関する資料についてであったようである。それは日本に残存する古文獻に着目した論考が見られたことからその傾向が窺える。更に、昨年引き続き『文選集注』に対する注目が非常に大きかったように思うが、これは2011年に上海古籍出版社により『文選集注』が再版された事実からも明らかである。『文選集注』はもはや中日両国の『文選』学における必須資料であると言えよう。また、第四部会では個別作品研究として多くの作品が俎上に挙げられたが、『文選』に採録される作品を起点として後世の類似作品の研究を行うなど、魏晋南北朝時代に限定されることなく幅広い論考が発表されたことが印象的であった。総じて、『文選』が後世の中国文学に影響を与え、日本や朝鮮の文学にも同様に影響を及ぼしており、時代や空間を超越して東アジア全体の文学研究において極めて重要な文献であるということを改めて認識させられた。

各部会での討論を終え、閉会式では全体を代表して4人の研究者が報告を行ったが、日本からは陳翀氏が代表された。私事ながら、学部生の頃からの師兄が壇上にて報告するのは一師弟として大変嬉しく、また誇らしく思われた。

また、開封市内の遊覧では、25日夜に「清明上河図」を模した清明上河園において「東京夢華」と題された水上劇を観覧し、翌26日には前日に訪れた清明上河園や数多くの拓本が取められた翰園碑林等を巡ったが、開封を訪れたことのない筆者にとっては大変有意義であった。

最後に、『文選』学会開催時には未だ大きな問題とはなっていないが、尖閣諸島の日本国有化によって、日中関係が決して良好とは言えない状況となった。筆者は現在留学中ということもあり、多くの方からご心配いただいた。幸い、大学内は比較的安全なこともあり、危険な目に遭うことはなかった。しかし、日本の報道状況を耳にするに、実際の状況とはあまりにかけ離れており、誇張しすぎである様に感じられた。安全だと言い切るつもりはないが、このようなことで日中間の学術交流に支障が出るようなことはあってはならないように思う。むしろ、このような時だからこそ盛んに交流すべきであろう。この影響で中止や日本人の出席自粛が求められた学会もあったと聞けが、やむを得ないこととは言え、あまりにもったいないことのように思う。余談ではあるが、筆者は10月12日から15日にかけて南京で開催された「東亜文明視野下的中国文学」国際博士生学術論壇にも参加した。これは東アジアの中国学研究を志す若手研究者が中心であり、同世代が多かったこともあり、余計な遠慮もなく盛んに議論が行われ、筆者も大変刺激を受けた。このように、中国における国際学会に参加することにより学術交流に務めることは、自身の見識を深くするためにも、また純粋に日中交流の面においても、非常に有効かつ重要な機会であるように思われる。

今回は、2年後の2014年、河南省都にある鄭州大学にて開催されるとのことである。無論、筆者も余程の事情のない限りは参加する予定である。鄭州にて多くの日本人研究者の方にお会いできるのを楽しみにしている。



写真2 先生方との記念写真

六朝学術学会の成立と現状、 及び課題

東京学芸大学
佐藤 正光

六朝学術学会は、1997年4月13日の設立総会において当時二松學舎大学教授であった石川忠久氏を会長に選任し、その後、会員による選挙を基盤として会長が役員を指名して発足した。筆者は、その何年も前から石川先生から六朝を対象とする学会を創設したいと聞いていたが、きっかけは『六朝学術学会報』第1集の「創刊の辞」に「1996年5月、上田武氏が江西省九江市の九江師範専科学校を訪れた折、旧知の同校陳忠教授より、翌年夏に廬山で開催予定の「国際陶淵明学術研討会」に参加を要請されたことに始まる」と記すように、外部的な働きかけからであった。上田武教授と陳忠教授との親好から、日中共同での陶淵明研究に関する国際学会の開催が提案され、1996年10月12、13日に神奈川大学で開催された日本中国学会大会において場所をお借りして、学会の設立が提案され決したのである。

このような設立の事情は、この学会の一つの意義とも言えるような特徴を持っている。それは、百数十名ばかりの小規模なこの学会が、これまでに三回の日中共同主催の中日学者陶淵明学術研討会(第3回は陶淵明国際学

術研討会に改称、1997、2000、2009)と北京大学と共催での中日学者六朝文学研討会(2006)とを開催したことである。これらの国際学会は、招くか招かれるかという招待形式の学会と違い、共同で運営する形態で、両者の立場が尊重され、陶淵明や六朝文学に対する研究の態度や方向性について大変寛容に討論が行われた。こうした対等の国際学会は日本と中国との間では例も少なく、六朝学術学会の果たした最も重要な意義であると言っても過言ではない。

日本においては、九江師専学院教授陳忠氏(2002)、北京大学教授傅剛氏(2005)、同北京大学教授銭志熙氏(2007)、復旦大学教授戴燕氏(2012)による講演も開催している。

六朝学術学会の名称は、秦漢と隋唐との間にある六朝時代(魏晋南北朝時代と同様の意義で用いる)が、科挙に先立つ九品中正制の政治体制にあって、儒教、道家に加えて道教、仏教が興隆し、五言詩、駢文とともに小説、文学論が隆盛し、書画芸術も発展して多彩な文化が華やかに展開した、それらの事象をすべて包括する研究の拠点にしようとの抱負を込めている。したがって、研究の公開は斯学の各方面から行われることを企図した。学会の主な活動は、年一回の研究発表4~5名、記念講演1名による大会と、1999年に青山学院大学教授の大上正美理事により始められた年二回の研究発表3名による例会とからなる。とくに例会は気軽に自由に参加できる雰囲気から若手の研究者が集まりやすく、大会よりも時間をかけて討論が行われている。また、これまで大会、例会ともに東京で行ってきたのを、今年初めて奈良女子大学で開催し地方の会員への便宜を図り、一步前進した感がある。

記念講演は、第一回大会から講演者名を挙げれば石川忠久氏、松浦友久氏、岡村繁氏、興膳宏氏、林田慎之助氏、陳忠氏、吉川忠夫氏、安田二郎氏、佐藤保氏、高橋均氏、中村圭爾氏、竹田晃氏、中嶋隆蔵氏、堀池信夫氏、渡辺信一郎氏、戴燕氏、妹尾達彦氏など斯学の泰斗が連なる。また、講演の内容は逐一学会報に掲載している。

学会報は、応募論文に対して毎回厳正な審査を行って水準の維持を保っている。研究論文は毎回6本前後に掲載し、その内容は海外の研究者からも評価されている。ただし、論文および研究発表は、文学に偏りがちな点が

最大の課題である。「学術」という学会の名称にふさわしい、多分野の会員の参加を促し、意欲を引き出せる発表の場の提供することがより求められている。

この学会は、時代が限定されていることによって話題が共有しやすく、異なる分野の研究発表や論文に接する

毎に、新たな発見があり、知識の広がりがあり、斯学の研究の拠点としてその機能を果たしていると言える。この体制を支えるべく、興膳宏会長と25名の理事・評議員が議論を重ねている。

❖ 各種委員会報告

大会委員会

委員長 花登 正宏

日本中国学会の本年度の大会(第64回)は、10月6日(土)7日(日)の両日、大阪市立大学で開催されました。大阪市立大学では平成9年(1997)以来15年ぶりの開催となります。

幸い好天に恵まれ、哲学思想部会・文学語学部会・日本漢文部会と3部会に分かれての研究発表会場では、周到な準備のもと行われた発表とそれに対する活発な質疑応答が続きました。また、6日には復旦大学の王水照先生による「宋代文学研究中的学理性建構—以文学与科学、家族、伝播、地域、党争之關係為中心」という興味深い特別講演が行われ、会員諸氏にはそこからさまざまなことを得られたことと存じます。さらに6日夜は場所を天王寺に移し、天王寺都ホテルにおいて多くの会員の参加を得て盛大な懇親会が開催されました。齋藤茂準備会代表のご挨拶の通り充実した内容で、列席された会員諸氏には旧交を温める、また新たな交わりを結ぶよい機会となったことと思われまます。これらはいずれも齋藤代表をはじめとする大阪市立大学教員、関係者そして学生の方のご尽力のたまもの、この場を借りてお礼申し上げます。大学教員は以前にもまして多忙となり、さらには大阪市立大学そのものが厳しい環境の中に置かれている中で、前回の開催からわずか15年を空けただけで再度ご開催いただいたこと、重ねて感謝申し上げます。

さて、来年度65回大会は秋田大学(吉永慎二郎代表)において、平成25年(2013)10月12日(土)13日(日)の両日に開催されます。秋田大学での開催は昭和50年(1975)第27回大会以来のこととなります。今年度の総会では、万全の体制を整えて会員の皆様をお迎えしたい

との吉永代表のご挨拶もありました。会員諸氏におかれましては、来年もふるってご参加下さるよう、お願い申し上げます。

なお、10月6日開催の大会委員会において、平成26年度の大会開催は大谷大学にお願いすることと決定し、翌7日開催の理事会において承認されました。大谷大学は平成元年(1989)以来2度目の開催となります。来年10月に秋田大学で開催される評議会において最終的に決定されることとなります。

論文審査委員会

委員長 富永 一登

○学会報第64集応募論文の審査の経緯

2012年1月20日締め切りの応募論文は全32編(哲学・思想部門8編、文学・語学部門23編、両分野での審査希望1編)であった。1月28日に論文審査委員会を開催し、論文1編につき3名の査読委員(論文審査委員会委員1名を含む)を決め、査読委員となった論文審査委員会委員が閲読者を兼ねることとした。依頼論文4編の閲読者も決定した。

3月31日開催の論文審査委員会(牧角悦子副理事長陪席)で、査読者3名の査読結果をもとに、哲学・思想部門4編、文学・語学部門12編の計16編の掲載を決めた。不採択の通知には、閲読委員が不採択理由まとめ、委員長・副委員長が内容を確認したものを付記することとした。

○3月31日の論文審査委員会での決定事項

- ・学会報第65集依頼論文執筆候補者を決定し、理事会に推薦することとした。
- ・文学語学部門から2名の学会賞候補者を決定し、理事

会に推薦することとした。あわせて、受賞理由執筆者を決めた。

- ・平成24年度日本学術振興会奨励賞推薦者を選定した。
- 10月6日の論文審査委員会
- ・学会報第65集の審査日程などを確認した。
- ・理事会から依頼された学会報の原稿枚数、字体、依頼論文を2編にすること、応募の際に審査を希望する部門に日本漢学を加えることについて検討した。その結果、以下のことを委員会の意見として理事会に報告することとした。

- (1) 原稿枚数、字体については現行通りとするが、字体は執筆者の希望にそうことも可能にする。
- (2) 依頼論文は2編に減らす。
- (3) 審査を希望する部門に日本漢学を加える。

※(3)については、「論文執筆要領」を修正することが7日の理事会で承認され、第65集の募集から適用されることになった。

出版委員会

委員長 竹村 則行

出版委員会は主に『学会報』と「便り」の編集出版を担当しています(『学会報』掲載論文の採否は論文審査委が行います)。ご案内の通り、学会は近年、会員数の減少に伴う予算規模の縮小を余儀なくされています。このような中、学術論文の水準を維持しつつ、適正な印刷費で『学会報』『便り』を出版するために、委員会として以下の改正骨子案をまとめました。更に関係委員会・理事会・評議員会で審議し、修正を含めて同意を得られた場合は、2014年度から実行に移されます。会員の皆様にも、その改正案の骨子をあらかじめお伝えします。

- ・「便り」改正案骨子…見積もり後、相当の印刷費減額が見込めれば、現行の彩色印刷を白黒印刷に改める。
- ・『学会報』改正案骨子…①論文の字体は原則として旧漢字を用いるが、本人の申し出によって常用漢字の使用を認める。②本人の責任による完全原稿の提出を求める。③原稿枚数を現行55枚から50枚に減らす。④抜刷費用の学会負担を廃止し、個人負担とする。⑤依頼論文数を現行4編から2編に減らす。

念のため付言しますが、次『学会報』65集は現行規定により編集発行されます。詳しくは本「便り」の末尾、及

び学会HPの論文執筆要領をご覧ください。

さて、以下出版委の立場をやや離れますが、この場を借りて『学会報』に関する感想を述べます。私は『学会報』を含む日本の中国学研究の情報を、全国の研究組織である日本中国学会が主導して、中国を含む国際研究機関へもっと強力に発信すべきと考えます。私は韓国や中国の研究者から、日本で中国研究の詳細を知りたいが、電子情報を含めて有力な情報が手に入りにくいとの声をよく聞きます。今日国際学会等の学術交流は盛んですが、国家による発信を含め、日本からの学術情報の発信は全般に遅れていると感じます。日本で中国学研究は日中の双方から疎んじられる恐れはありますが、逆に本学会が積極的に学術情報を海外に提供することによって、本学会の存在意義が更に高まるのではないかと思います。

選挙管理委員会

委員長 土田健次郎

本年度は会則第11条にもとづき、下記の通り、評議員選挙、理事長選挙、監事選挙が行われた。それぞれの結果については別途公表されているので、ここには記さない。

1, 評議員選挙

平成24年(2012)5月26日、早稲田大学において投票用紙発送業務、同6月30日、同大学において開票。なお北海道地区の当選者一名が逝去したため、同9月5日に同地区の次点者を繰上当選とした。

2, 理事長選挙

平成24年(2012)7月7日、早稲田大学において投票用紙発送業務、同8月4日、同大学において開票。

3, 監事選挙

平成24年(2012)10月5日、大阪市立大学において行われた次期評議員会で投票及び開票。

4, 評議員繰上当選

平成24年(2012)3月31日をもって評議員3名が役員定年(顧問を除く)となったため、平成22年(2010)に実施された評議員選挙の結果にもとづき、新たに3名の会員が平成24年(2012)4月1日付けで評議員に繰上当選となった、後任の評議員の任期は平成25年(2013)3月31日までである。なお同じく平成24年(2012)4月1日付けで繰上当選となった評議員が他に2名いるが、その件については「日本中国学会便り」平成24年(2012)第1号で報告済みである。

○役員(顧問を除く)定年の評議員
三浦國雄会員、向嶋成美会員、小南一郎会員

○後任の評議員

植木久行会員、間嶋潤一会員、中里見敬会員
また北海道地区の評議員1名が逝去されたため、平成22年(2010)に実施された評議員選挙の結果にもとづき、新たに1名の会員が平成24年(2012)9月10日付けで評議員に繰上当選となった、後任の評議員の任期は平成25年(2013)3月31日までである。

○逝去された評議員

高木重俊会員

○後任の評議員

弼和順会員

5, その他

地区によっては投票数が極めて少ない。会員の意見を学会運営に反映させるためにも、積極的投票を要望したい。

で提案のあった終身会員の制度についても、80歳以上で会費を免除される特別会員制度との整合性に問題が生じるので、見合わせることにしたい。

下記の会則変更案は、本委員会の試案である。会則の変更案と変更時期については、理事会、評議員において速やかに審議されたい。

【会則変更案】

(現行会則)

第8条(会費)2 ただし顧問・客員会員および特別会員はこれを免除する。

「通常会員 普通会員 7,000円」

(変更案)

第8条(会費)2 ただし顧問・客員会員および特別会員は会費を免除する。また、満70歳以上の会員で学会基金に3万円以上の寄付をされた会員についても会費を免除する。

「通常会員 普通会員 7,000円 普通会員(満70歳以上)4,000円」

提言(2)

近年、中国学研究者が減少した原因の一つとして中等高等教育において漢文教育の時間が減少して青少年が中国古典に触れる機会が少なくなったことが挙げられる。日本文化、中国文化を知るためには、中国古典についての知識は不可欠であり、漢文教育の振興によって中国学の振興を図る必要がある。そのため、全国漢文教育学会や和漢比較文学会等との連携を図って漢文教育を振興するため、日本中国学会大会において日本漢学の部会を常設する。また、日本漢学の専門家を大会委員として加え、大会時の日本漢学部門の発表者を確保する等の方策を講じ、大会開催校に発表者を捜す負担を掛けないようにする。また、大会発表と関連して、論文審査委員会には、論文採用に際して、思想・語学文学・日本漢学のバランスに配慮して極端な偏りが生じないよう配慮を求める。

提言(3)

理事会構成員(理事)の任期制の導入については、理事会活動の活性化を図るため導入するのが望ましい。理事会の運営や方針の継続性に配慮しつつ、任期を2期4年とし、再任を妨げない。

25年度以降、理事長の任期(1期2年乃至2期4年)に合わせて1期2年乃至2期4年ごとに理事若干名を若い理事と入れ替える。ただし、理事長が評議員の互選で選ばれ、2年ごとに理事を指名する際には、各地区、分野別の理事のバランスに配慮していただきたい。

将来計画特別委員会報告

委員長 佐藤錬太郎

理事長より将来計画特別委員会に諮問のあった名誉会員制度の創設、漢文教育の振興、理事の任期制について、メールで意見交換しつつ提言を作成し、2012年10月5日に大阪市立大学で開催された理事会、評議員会に提言を報告した。理事会の修正を経て、再度、本委員会内で検討した結果、次のような提言を行うこととした。

提言(1)

70歳以上の会員の会費減額と会則変更案について

近年、大学の定年退職を期に日本中国学会を退会する会員が漸増し、年間40名乃至50名に達している。大学の定年は65歳乃至70歳であり、退職後の会員は、80歳で特別会員となって会費が免除されるまでの間、年金生活のもとで会費を支払わねばならない。この経済的負担を軽減し、定年退職後も脱会せずに引き続き学会活動にご協力ご支援をいただけるよう、70歳以上の会員の会費を4千円に減額する。また、70歳以上の会員で学会基金に3万円以上の寄付をされた会員については会費を免除する。

なお、諮問のあった名誉会員制度については、名誉会員とする根拠となる会員歴(会員実績、学会への貢献度)を裏付ける十年以上前のデータが無い現状を鑑み、名誉会員制度の創設は見合わせることにしたい。また理事会

❖ 日本中国学会 2011年度(平成23年) 収支決算書

2011年(平成23年)4月1日～2012年(平成24年)3月31日

(単位：円)

科目	予算	決算	摘要	差額
1.前年度繰越	¥8,116,967	¥8,116,967		¥0
2.会費	¥10,500,000	¥12,026,982		¥1,526,982
3.寄付金	¥1,000,000	¥767,620		¥-232,380
4.預金利息	¥2,000	¥1,329		¥-671
5.著作権料分配金	¥0	¥32,000		¥32,000
総計	¥19,618,967	¥20,944,898	(A)収入総計	¥1,325,931

科目	予算	決算	摘要	差額
1.事務局総務費	¥2,210,000	¥2,210,577	(1)～(7)	¥-557
(1)印刷費	¥900,000	¥939,445	「便り」封筒印刷費を含む	¥-39,445
(2)通信費	¥650,000	¥560,792	「便り」発送費を含む	¥89,208
(3)交通費	¥100,000	¥60,280	事務局補佐員交通費等	¥39,720
(4)消耗品費	¥50,000	¥49,001		¥999
(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
(6)雑費	¥250,000	¥391,059	うち振込手数料¥129,610	¥-141,059
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
2.事務局人件費	¥1,560,000	¥1,496,000	(1)(2)	¥64,000
(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
(2)謝金	¥1,200,000	¥1,136,000	事務局補佐員謝金等	¥64,000
3.事務局会議費	¥330,000	¥375,349	(1)(2)	¥-45,349
(1)会議費	¥30,000	¥110,069		¥-80,069
(2)役員旅費	¥300,000	¥265,280	第1回理事会	¥34,720
4.事業費	¥6,550,000	¥5,666,338	(1)(3)	¥883,662
(1)学会報等刊行費	¥4,150,000	¥4,466,338	イ～ニ	¥-316,338
イ.印刷費	¥1,900,000	¥2,255,080	学会報及び名簿	¥-355,080
ロ.編集費	¥1,600,000	¥1,600,000		¥0
ハ.翻訳謝金	¥300,000	¥266,000	英文要旨作成	¥34,000
ニ.発送費	¥350,000	¥345,258	三見印刷業務委託等	¥4,742
(2)学術大会運営費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
(3)若手シンポジウム運営費	¥1,200,000	¥0		¥1,200,000

科目	予算	決算	摘要	差額
5.各種委員会運営費	¥1,170,000	¥1,014,903	(1)～(7)	¥155,097
(1)大会委員会	¥65,000	¥57,685		¥7,315
イ.通信費	¥5,000	¥650		¥4,350
ロ.会議・旅費	¥50,000	¥51,720		¥-1,720
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥5,000	¥315		¥4,685
(2)論文審査委員会	¥630,000	¥637,458		¥-7,458
イ.通信費	¥150,000	¥112,860		¥37,140
ロ.会議・旅費	¥400,000	¥451,165		¥-51,165
ハ.謝金	¥60,000	¥60,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥20,000	¥13,433		¥6,567
(3)出版委員会	¥200,000	¥176,110		¥23,890
イ.通信費	¥15,000	¥4,620		¥10,380
ロ.会議・旅費	¥150,000	¥156,490		¥-6,490
ハ.謝金	¥10,000	¥5,000		¥5,000
ニ.学会便り編集費	¥20,000	¥10,000		¥10,000
ホ.消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(4)選挙管理委員会	¥20,000	¥5,080	非改選年度	¥14,920
イ.通信費	¥5,000	¥80		¥4,920
ロ.会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	¥5,000		¥15,000
イ.通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ.会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(6)将来計画特別委員会	¥20,000	¥5,080		¥14,920
イ.通信費	¥5,000	¥80		¥4,920
ロ.会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(7)ホームページ特別委員会	¥215,000	¥128,490		¥86,510
イ.通信費	¥5,000	¥3,490		¥1,510
ロ.会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ.謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ.ホームページ管理費	¥200,000	¥120,000		¥80,000
1～5 予備費	¥11,820,000	¥10,763,167		¥1,056,833
	¥7,798,967	¥0	支出費目としては計上しない	
合 計	¥19,618,967	¥10,763,167	(B)支出合計	¥8,855,800
次年度繰越金	-	¥10,181,731	(A)収入総計 - (B)支出合計	
総 計	¥19,618,967	¥20,944,898		¥-1,325,931

学会基金

基本金	¥4,300,000
前年度繰越金	¥719,549
預金利息	¥989
信託収益金	¥570
合 計	¥721,108

支出の部	日本中国学会費	¥240,000
	次年度繰越金	¥481,108
合 計		¥721,108

備考・基本金内訳	金額
奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

2012年4月28日

日本中国学会監事

内山 精也 (印)
阿川 修三 (印)
若川 桃子 (印)

❖ 日本中国学会 2012年度(平成24年) 予算書

2012年(平成24年)4月1日～2013年(平成25年)3月31日

(単位：円)

	科目	予算	摘要
収入の部	1. 前年度繰越	¥10,181,731	
	2. 会員会費	¥11,000,000	
	3. 寄付金	¥900,000	
	4. 預金利息	¥1,500	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合計	¥22,083,231	

	科目	予算	摘要
支出の部	1. 事務局総務費	¥2,560,000	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥1,100,000	「便り」・封筒・投票用紙等を含む
	(2)通信費	¥700,000	「便り」・投票用紙等発送を含む
	(3)交通費	¥100,000	
	(4)消耗品費	¥50,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥350,000	振込手数料および対外費を含む
	(7)業務委託料	¥210,000	
	2. 事務局人件費	¥1,560,000	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥360,000	
	(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐謝金を含む
	3. 事務局会議費	¥720,000	(1)(2)
	(1)会議費	¥120,000	
	(2)役員旅費	¥600,000	第1回及び第4回理事会
	4. 事業費	¥8,150,000	(1)～(4)
	(1)学会報等刊行費	¥4,750,000	イ～ニ
	イ. 印刷費	¥2,500,000	学会報及び名簿
	ロ. 編集費	¥1,600,000	
	ハ. 翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
	ニ. 発送費	¥350,000	
(2)学術大会運営費	¥1,200,000		
(3)若手シンポジウム運営費	¥1,200,000		
(4)特別会計積立基金拠出	¥1,000,000		

	科目	予算	摘要
支出の部	5. 各種委員会運営費	¥1,295,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥65,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥730,000	
	イ. 通信費	¥150,000	
	ロ. 会議・旅費	¥500,000	
	ハ. 謝金	¥60,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥190,000	
	イ. 通信費	¥10,000	
	ロ. 会議・旅費	¥150,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥20,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選挙管理委員会	¥105,000	改選年度
	イ. 通信費	¥10,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
ハ. 謝金	¥40,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
(6)将来計画特別委員会	¥20,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
(7)ホームページ特別委員会	¥165,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. ホームページ管理費	¥150,000		
1～5 予備費	¥14,285,000 ¥7,798,231		
	合計	¥22,083,231	

学会基金

	基本金	予算
収入の部	前年度繰越金	¥481,108
	日本中国学会賞積立金	¥1,000,000
	預金利息	¥1,000
	信託収益金	¥500
	合計	¥1,482,608

	支出の部	予算
支出の部	日本中国学会費	¥160,000
	日本中国学会若手シンポジウム奨励費	¥50,000
	次年度繰越金	¥1,272,608
	合計	¥1,482,608

備考(基本金内訳)	基金名	予算
	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

❖ 学界展望へのご協力をお願い

『日本中国学会報』には、毎冊、「学界展望」が掲載され、またその基礎資料となる文献目録が学会ホームページに掲載されています。これは編集担当校の尽力によって可能な限り広く収集しているものですが、出版物が増加する一方の昨今、捜求はいよいよ困難になっています。執筆されたご本人からのお知らせをお願いするゆえんです。

次号、第65集(2013年10月刊行予定)掲載の「学界展望」の基礎資料として、2012年の文献目録を作成します。2012年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせ願います。

なお、すでに2006年から郵便によるご報告は廃止しておりますので、電子メールでのみお知らせください。

論文も著書も一篇、一冊ごとに部門・分野をご記入の上、以下の該当する部門の担当者にお送り願います。

[哲学部門] 林 克 会員(大東文化大学)
電子メール: nihonchugoku.tetugaku@gmail.com

[文学部門] 岡崎 由美 会員(早稲田大学)
電子メール: nihonchugoku.bungaku@gmail.com

[語学部門] 荒川 清秀 会員(愛知大学)
電子メール: nihonchugoku.gogaku@gmail.com

※アドレスは学界展望報告用のもので、次年度以降担当者が変わっても、引き続き使用する予定です。

各部門の分類は以下の通りです。

- 哲学部門
- 一、総記
 - 二、先秦
 - 三、秦・漢
 - 四、魏・晋・南北朝
 - 五、隋・唐

- 六、宋・金・元
- 七、明・清
- 八、近現代
- 九、琉球・朝鮮
- 十、日本
- 十一、書誌学
- 十二、その他

○文学部門

- 一、総記
- 二、先秦
- 三、漢・魏・晋・南北朝
- 四、隋・唐・五代
- 五、宋
- 六、金・元・明
- 七、清
- 八、近現代
- 九、民間文学・習俗
- 十、日本漢文学
- 十一、比較文学
- 十二、書誌

○語学部門

- 一、総記
- 二、文字・訓詁
- 三、音韻
- 四、語彙
- 五、語法
- 六、方言
- 七、教育・学習(教科書は含みません)

※国内発行の刊行物に限ります。発表言語の種類は問いません。

❖ 2012年度会員動向

●会員動向 (2012年10月16日現在)

総会員数1,842名、準会員数58機関、賛助会員数12社

●訃報

『学会便り』本年度第1号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(敬称略)

渋谷 瑞江	(北海道地区)	2012年2月8日
高木 重俊	(北海道地区)	2012年9月1日
楠山 春樹	(関東地区)	2011年10月30日
金田純一郎	(近畿地区)	2012年1月21日
佐藤 義寛	(近畿地区)	2012年6月10日

●退会会員

○退会申出会員 (第1回理事会承認分) 13名

成澤 勝	佐藤 由美	孫 猛	
荒井 充夫	田中麻紗巳	陳 栄生	
晏 妮	山田 英雄	陳 洲	
片山 智行	名和 又介	三枝 裕美	他1名

○退会申出会員 (第2回理事会承認分) 5名

荒木日呂子	呉 念聖	小島 久代
近藤 篤	坂井東洋男	

○4年会費未納による退会会員 35名

●住所不明会員 22名

荒井 知子	猪股 宣泰	大嶋 隆
古城 広恵	山谷 悦子	馬渡 幹子
宮内 四郎	玉野井純子	鶴成 寛子
新島 翠	原 貴史	前田 利昭
村上 嘉英	吉田千奈美	羅 党興
中山 至	張 猛	長井 由花
蔡 麗玲	三瓶奈津子	王 艶珍
李 承律		

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください(メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org)。

❖ 2012年度新入会員一覧

10月5日開催の今年度評議員会で入会が承認された会員は、以下の通りです。

●通常会員 12名

程 遠	東北大(院)
下村 泰三	二松學舎大(院)
杉田 泰史	
武田 祐樹	二松學舎大(院)
楊 冠穹	東京大(院)
阿部 範之	同志社大
上 なつき	京都大(院)
竹田 治美	京都産業大
西川 ゆみ	奈良女子大(院)
横山俊一郎	関西大(院)
李 恬	九州大(院)
劉 潔	九州大(院)

●国外会員 2名

吳 双	四川大(院)
李 莉薇	中山大(院)

なお、以下の方々については5月に開催された持ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度の名簿に記載されています

●通常会員 17名

佐藤 章和	永井 孝子	泉 朝子
江波戸 互	亀井 有安	徐 子怡
田中 祐輔	藤田 拓海	山本 恭子
李 瑾	劉 靚	田村 容子
田 訪	福谷 彬	横山きのみ
王 晶	李 祥	

●国外会員 2名

高 仁徳	章 剣
------	-----

●準会員 1機関

山形県立米沢女子短期大学附属図書館

●賛助会員 1社

(株)国書刊行会

❖ 事務局からのお知らせ

彙報

第1回理事会(5月12日開催)での決定事項を受け、5月22日付で通信による臨時評議員会を開催した。報告事項は以下の通り。

- 2011年度日本中国学会賞受賞者の決定について
[哲学・思想部門]
該当者なし
[文学・語学部門]
松浦 智子「楊家将の系譜と石碑—楊家将故事発展との関わりから—」
上原 究一「『李卓吾先生批評西遊記』の版本について」

- 新入会員の決定について
通常会員17名、国外会員2名、準会員1機関、賛助会員1法人の入会希望があり、審議の結果、全員の入会を承認。

- 第一回日本中国学会若手シンポジウム奨励賞の選定について
高山 大毅「田中江南の投壺復興—徂徠学のゆくえ」

また、10月5日開催の今年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

[報告事項]

- 理事長による会務報告
- 2013・14年度評議員・理事長選挙の結果報告
- 2013・14年度副理事長・理事の委嘱について
- 監事選挙の結果報告
- 会員動向について
- 『日本中国学会報』第64集及び名簿の発行について
- 学会報編集担当校・学会展望担当校・大会開催校について

学会報編集担当校 東京学芸大学

学会報編集担当校 哲学／大東文化大学

学術大会開催校

文学／早稲田大学
語学／愛知大学
秋田大学(2013年10月12日[土]～13日[日])

- 各種委員会報告
- 広報委員会の設置について

[審議事項]

- 2011年度決算報告・監査報告
- 2012年度予算案について
- 新入会員の承認
- 第64回学術大会総会次第について
翌10月6日の総会において、評議員会の議決事項が報告された。

◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2カ年(2011・2012年度)未納の方には、本年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

郵便振替口座：00160-9-89927

◎住所・所属機関等の変更について

近年、学会からの送付物(学会報・便り等)の発送に宅配業者のメール便を利用しています。メール便では一般に転居先への転送が行われませんので、転居の際は速やかに事務局までご通知ください。また、所属機関に変更が生じた場合、特に学生会員の皆さんが学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡くださいますようお願い申し上げます。

メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org

◎論文執筆要領について

学会報64号に掲載のものは、旧バージョンです。論文投稿の際には、この「学会便り」に掲載されている新しい執筆要領に従って提出願います。

❖ 「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行の「学会便り」に載せることになっています。

2012年1月から12月までに開催されました国内学会の原稿は、来年(2013年)2月末日までに、下記宛にE-mailでお送りください。入力していただいたものをそのまま印刷します。校正はありません。この点、あらかじめご承知くださるようお願いいたします。

nihonchugoku.tayori@gmail.com (「学会便り」2013年第1号編集用アドレス)

❖ 「研究会等開催の案内」記事募集

「学会便り」には、会員の参加が予定される各種研究会等の案内を掲載いたします。

- ・1月から4月に開催される予定のものは、12月発行の「学会便り」に、
- ・5月から12月に開催予定のものは、4月発行の「学会便り」に、

掲載します。研究会等の開催を計画されている場合は、研究会の名称、開催日時・場所、連絡先などを、上記アドレスにお知らせ願います。

編集小記

今年第2号の「便り」をお届けします。今号は、巻頭言「日本漢文部会について」(堀池副理事長)のほか、中国文選学会(国際学会)、六朝学会(国内学会)報告、各種委員会報告、及び事務局からの通知等から成ります。特に『日本中国学会報』論文募集や「学界展望」への資料提供、「国内学会消息」については、会員の皆様のご協力が不可欠です。応募や通知をよろしく願います。

本学会が成立して64年、近年は日中相互の留学生・研究者の交流や国際国内学会開催が普通になりました。絶海の島嶼を繞って国益の軋轢が喧しい昨今、中国学術を真摯に研究する本学会の存在は益々以て重みを増しています。

組版について、今回もクラフティードザイン社のご協力を得ました。感謝します。
(竹村則行)



「日本中国学会報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用いる。なお、第1ページの見易い場所に、投稿原稿を1行20字毎ページ20行に変換した場合の枚数を明記する。原稿量の上限は、字数ではなく、枚数によるので注意する。手書きの場合は電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として正漢字体（印刷標準字体）に統一する。活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所明記する。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文にあっては、ウェード式・漢語・拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例孫逸仙Sun Yat-sen）、本人が自分

の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内 日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜刷

18. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡のこと。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

その他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）

（平成13年5月13日修正）

（平成14年10月13日一部修正）

（平成15年10月5日一部修正）

（平成19年10月7日一部修正）

（平成20年5月17日一部修正）

（平成21年10月11日一部修正）

（平成22年6月6日一部修正）

（平成22年10月10日一部修正）

（平成23年10月9日一部修正）

（平成24年10月7日一部修正）